

## あ と が き

彼が亡くなってから、いろいろなことで皆様に助けられてなんとか過ごしております。

ほとんどすべてのことが、損得や経済優先で動く今の時代に、そのようなことを度外視して動いてくださる方たちの存在によってこの本は生まれました。一つの小さな僥倖と言ってもいいかもしれません。

彼のためだったらやってもいいと一肌脱いでくださった方々の心と、そう思わせるような存在であった彼の心が出会ってできた本。

彼はある意味で非常に理想が高く、不完全なものは出したくないと思っていた節があります。私が本を出さないのと聞くと、ゴミみたいなものはださなくていい、と答えたこともありました。でも水島朝穂先生がおっしゃったように、来るものは拒まずという性格でもありましたので、皆さんが本を出してくださったことは、はにかみながらも素直に喜んでいるのではないかと思います。

彼は本当の意味でやさしい人でした。人の足を引っ張ったり、貶めたり、ばかにしたりすることは一切ありませんでした。

私には思想的なことはわからないので、性格から想像するしかないのですが、かなり過激で理想主義なところもあったのではないかと思います。内気ゆえにぶっきらぼうなところもあったので、誤解をうけたこともあるかもしれません。理想は高かったけれど、実際の行動は地に足が着いたものだったと思います。

偲ぶ会では、学内で抗議を繰り返す学生に一日中体を張ってくっついて守ったという話もお聞きしました。

ある院生の方には、何時間も論文について指導してもらい、今でもその添削の入った論文をお守りにしているという話も伺いました。

実際の行動は目の前の人々、個々の学生さんやお弟子さんのことを本当によくしてあげようという思いで、個人個人に真摯に向き合ったものでした。

自分のことは後回しになってしまったのか（気づいてあげられなかったこと、悔やんでも悔やみきれません）、2017年8月11日に体調不良を訴え、自分で運転して一緒に向かった病院で、ステージIVのがんと宣告され、1か月半も経たない9月23日に逝ってしまいました。

泣き言も言わず（かえって言ってくれた方が楽であると思えるほど）あまりにも見事に去って行きました。

またね。という言葉のみを残して。

残された者には、これが現実のことだと思えないような感覚もあります。また、これまで当たり前だと思っていた彼という存在がどれほど大きかったか、毎秒、毎秒のようにつきつけられる日々となってしまいました。ただ一緒にごはんを食べること、豆を挽いて淹れてもらったコーヒーを飲むこと、スーパーに買い物に行くこと、お天気などのたわいもない話をする事、ワインを飲むこと、展覧会に行くこと、映画に行くこと、そんな日常のひとつひとつが彼と一緒にあったから宝物であったことを、失ってから知ることとなりました。

生きていく意味が突然なくなってしまう、死ぬまで続くであろう絶対的な喪失感とともにどうやって生きていったらいいのか、今まで能天気生きてきた私は途方に暮れています。

そんな私にとってもこの本の存在は小さな希望です。

日々本当にお忙しい方々が、何の見返りも求めず時間と労力を割いてこの本を作ってくださったことにこの場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございますございました。

こんなことを書き連ねてしまったのを見て、今ごろどこかで口をちょっとまげて、苦笑いをしているかもしれません。

今関 佳子